

# 青年海外協力隊野球隊員関連事業 ーこれまでの歩みと展望ー

スポーツ文化研究領域

5023A055-9 濱田 大輔

研究指導教員:川島 浩平 教授

## 研究背景および目的

JICA の事業実績・派遣実績を見ると、青年海外協力隊のこれまでの体育・スポーツ隊員の派遣数は、2020 年 3 月末時点で約 5000 名の支援者を各国へ送ってきた。この中でスポーツに特化すると野球、柔道、陸上を始めとした全 27 種の競技から約 2700 人が世界各国で活動してきた。中でも、1 番多い派遣競技は野球であり、500 人を超える。こうした背景には、日本において野球は一大潮流を成しているスポーツであるからと考えられる。実際、甲子園大会やプロ野球は例年社会的な盛り上がりを見せている点からは「野球」が大きな人気を博していることが窺えるほか、直近の世界大会における好成績に見られるように競技力の観点からも、野球は日本において代表的なスポーツであることが窺える。こうした点からも「日本が「野球」を普及」することには、文化視点からも競技視点からも意義があることといえよう。しかし、論を先取りすれば、過去の野球隊員の実績のその大多数は、指導人数の記載、短期間に渡り数回の支援のため、支援前の現状に元通りすることが多かった。そのため、本研究では、JICA の野球隊員の長期に渡り継続的な支援を行なった報告書に着目し、彼らの支援をめぐる実態に迫る。

本研究では、青年海外協力隊野球隊員の支援の実態を明らかにすることを目的にする。過去の野球隊員の実績のその大多数は、指導人数の記載、短期間に渡り数回の支援のため、支援前の現状に元通りすることが多かった。そのため、本研究では、JICA の野球隊員の

長期に渡り継続的な支援を行なった報告書に着目し、彼らの支援をめぐる実態に迫る。

本研究の目的の達成に向けて、次節では過去に JICA が行なった野球支援の報告書を通して目的を達成するための方法を導き出していく。

## 研究方法

文献調査に基づく。JICA は青年海外協力隊に対し 2003 年から報告書を要請し、JICA 図書館で報告書の閲覧が可能である。野球隊員の報告人数は 600 人以上に登るが、1 ヶ月のみの派遣者もいる。そのため、青年海外協力隊で長期に渡って支援してきた人々はどのようにアプローチをして課題と向き合ってきたのかを検討するため 2 年以上の協力隊員の報告書を対象に調査していく。

具体的な成功例として、競技力向上、競技人口の増加、充実した設備の建設やアスリートの誕生を取り上げていく。

要請内容とはかけ離れた行動、指導人数の表記のみであるものなどを失敗例として取り上げる。

## 研究の構成

### 【第 1 章】

JICA の歴史について、JICA が発行している国際協力事業団 25 年史と国際協力機構史 1998～2018 を用いて述べていく。

第二次世界大戦で敗戦した日本は、ドイツに次ぐ世界第二の援助受取国であった。日本の復興にはアメリカを中心に、各種の国際機構、各国の NGO からの支援を受けた。アメ

リカの民間団体からは、医薬品、学用品、国際児童基金からは、ミルクや衣料品などが送られ、日本の復興の原動力となった。

1951年9月8日サンフランシスコにて、サンフランシスコ講和条約が調印され翌年の1952年4月28日に条約の発行により戦後に世界からの援助を受けた日本は、国際復帰を果たした。

第二次世界大戦後には、次々と新しい独立国が誕生したが、自国の運営には自力で建て直すしか無かったが、その多くの国は経済的自立が困難であり、先進国の援助を必要としていた。1954年に日本はコロンボ・プランの加盟により、政府が主本となり技術協力を本格的に開始した。このような、日本の国際協力の歩みから、青年海外協力隊が発足されるまでの歴史、JICAがスポーツ支援を行う意義まで述べている。

## 【第2章】

青年海外協力隊野球隊員の成功・失敗事例の特徴を明らかにする。

2年以上の隊員の報告書で、半年に1度以上必ず記録の残っている全23名を対象に調査していく。

筆者の定めた基準での成功例は、9名で失敗例は10名である。残りの3名は現在派遣中であり、その途中経過を述べている。

## 【結章】

成功例と失敗例の共通点と研究の限界について述べている。

成功例の共通点として1つ目は、派遣国のカウンターパートの重要性である。日本でボランティアという言葉は浸透しているが、世界ではボランティアをする程の生活に余裕のない人が多くいる。成功例にはカウンターパートが積極的に行動する場面や、隊員の意見に対して協力的なシーンが多く見られている。

2つ目は、配属先での要請が2つ以上ない

ことである。成功例には技術指導に特化したものか、普及活動に特化したものである。2年間という限られた期間のなかで成果を出すため、どちらか1つに絞った支援が結果をもたらしている。

3つ目は、国民性への理解である。例えばフィジーに派遣された大嶋は、ウォーミングアップでは国民性に合わせ、音楽をかけながら行うことで重要であるが地味な動作に対して、モチベーションの引き上げ方など細かな部分まで理解している。

失敗例の共通点として成功例の真逆であると考えられる。

また、今回の報告書を通してアメリカのMLBの支援の大きさを感じた。ガーナの事例では、アフリカの選手を集めたトライアウトの実施で、野球というスポーツを職業として目標を持たせる取り組みを行っていることや、野球教室の開催が日本のNPBに比べても多い傾向にある。一方で、日本のプロ野球は読売巨人軍が積極的に活動しJICAとも連携をとっているが、他の球団の事例というものは少ない。日系企業、日本人がボランティアに対する意見が割れている事情も考えられる。

研究の課題は、今回、隊員の報告書から読み取り、野球隊員の活躍を取り上げてきたが、文章から読み取れるものには限界がある。実際に、隊員へのインタビューを行うことで、文章には書ききることのできないことや、現地で行った細かい練習内容、試合結果、野球クリニックでの成果、リアルな生活面における部分まで聞き出すことで、これからの青年海外協力隊及び野球隊員の活躍を深掘りできると考える。